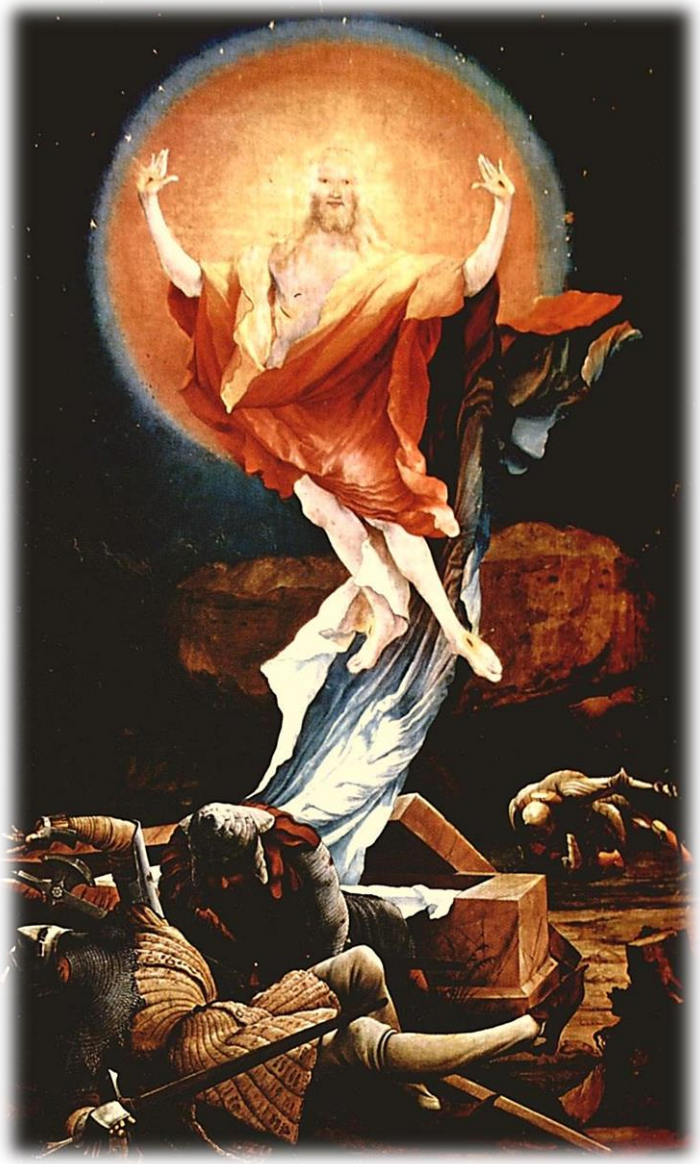


Atsuko Kudo Mail Magazine193

2013.03.31

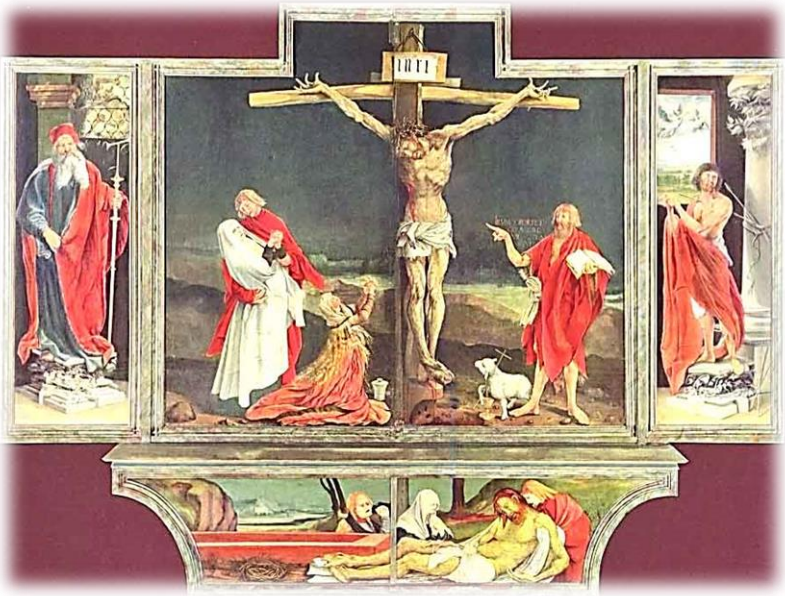
●グリューネヴァルト

イースター、おめでとうございます！
ドイツの多くの教会のイースター礼拝では、「イエスは確かによみがえられました！」と挨拶し、「主は確かによみがえられました！」と言って応答します。

私も、喜びをもって、皆さまに「イエスは確かによみがえられました！」とご挨拶させていただきます。メルマガを受け取られた皆さまも、「主は確かによみがえられました！」と宣言応答してくださいますなら嬉しいです。

皆さまは、どのような受難週を過ごされましたでしょうか。
私は、ドイツ語でグリューンドナスターク、カールフライタークと呼ばれる受難の木曜と金曜を、聖書の受難箇所、『マリア福音姉妹会』の創設者であるマザー・バジレアのイエス様の受難の道を辿るために書かれた本、その朗読録音、讃美集とともに、祈りの時を持ちました。

9 年前の受難週、私はダルムシュタット市にある『マリア福音姉妹会』にて 5 日間の祈りの時を過ごしました。その時のことは、メルマガや拙著「賛美のこころ」にも書かせていただきましたが、それは、私のその後の歩みを大きく変えるほどの主の愛に触れる貴重な時となりました。



そして今年は我が家にて、あのときと同じテキスト、同じ録音とともに、合間合間に賛美と祈りを入れながら、主の受難を、共に歩ませていただきました。

今回は、9 年前のとき以上に自分の罪深さを自覚させられ、イエス様の苦しみのひとつひとつの意味が迫り、さらなる主の愛に揺さぶられた 2 日間を過ごしました。

●グリューネヴァルト（1475/1480 年頃～1528 年）

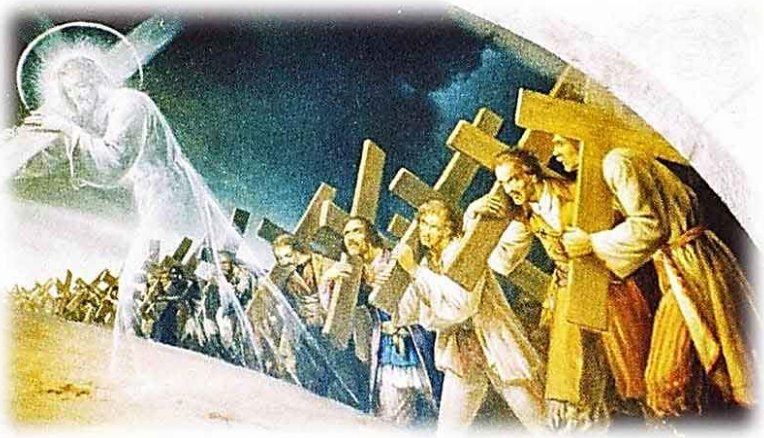
受難日の前日の水曜日、私は、マリア姉妹会のもうひとりの創設者であるマザー・マルテュリア・マダウスが書かれた、「イエスの愛と受難―マティアス・グリューネヴァルトのイーゼンハイムの祭壇画の世界」の解説を読みました。

以下、松下瑞子さんが訳されたマザー・マルテュリアの解説の一部を紹介させていただきます。
「グリューネヴァルトは、控え目ではありますが、世紀の変わり目に出現した表現主義派の先駆者でもあります。イエスの体の描き方は自然主義派ですが、彼の創作のおもな目的は、「私たちの罪のために十字架につけられたキリスト」という奥義を描くことでした。それゆえにグリューネヴァルトは、十字架につけられた主の体に私たちの罪を描いたのです。「仲間を赦さない家来」（マタイ 18 章）の悪意に満ちた目は、隣人を批判する罪を思い出させるために、脇の下の暗部から私たちの方をじっと見つめているように見えます。イエスの脇の少し下には、非難する者の固く結んだ唇を識別することができるでしょう。彼はまた、罪を表すために腰布を使っています。布を結んだ左側には二つの高慢な目が見えます。・・・・」**（引用箇所：「イエスの愛と受難―マティアス･グリューネヴァルトのイーゼンハイムの祭壇画の世界」さし絵 18、２２頁、マザー・マルテュリア・マダウスによるドイツ語版「Jesus von Augen gemalt」、あるいは英語版「Jesus―a Portrait of Love」の日本語版、訳者：松下瑞子　さし絵抜　1995 カナン出版・マリア福音姉妹会）**

そうやって、イエス様のみ体をじっくりと眺めてゆくと、見えてくるではありませんか！私の罪、心の醜さ、私の顔が！そのように、水曜の夜は、イエス様の体に刻まれた私の罪を告白し、また人々や国々、町、家のためにも祈る時を持ち、受難の木曜日を待ちました。

そして受難の 2 日間、主の体に刻まれたひとつひとつの鞭打ちの傷が、私のひとつひとつの罪のためであったことを思い、自分の罪の深さと、主が受けられた冒涜、暴力、鞭打ち刑の苦痛、苦悩の大きさに胸が打たれたことは言うまでもありません。

それから、霊想テキストの、ひどい鞭打ちで弱り果てたイエス様が、十字架を背負いきれずに、何度もその十字架を落としたところに来たときでした。そこに挿入されていた讃美歌の一節に、驚きました。
♪あなたに感謝します。あなたがその十字架を地に投げ落とされたゆえ。そうやって、あなたは、私の十字架の恥から私を贖い出してくださいました。♪
もちろんこれは、作詞者の霊的解釈によるものです。しかしこの讃美歌から読み取れるのは、私が十字架を負うことを阻む恥を、主が地に投げ落としてくださったということです。それは、私がその恥を自我とともに地に投げ捨て、キリストの贖いのゆえに、はずかしめをもろともせずに（ヘブル 12:2, 13:13）、自分の十字架を負って主に従えるようになるためだということなのです（ルカ 9:23,24）！ハレルヤ！



●近況報告とお祈りのお願い

1．聖書の学び

３月は、一ヶ月にわたった家の改築工事で落ち着かない時期でしたが、主の守りと導きをいただきながら、ドイツ語の新しい賛美資料を訳し終えることができました。５月には、その資料の著者である神学者と会見できる予定です。

また、同時に「礼拝の歴史」を学び始めましたが、ユダヤ教のシナゴーク礼拝の流れを汲む初代教会の礼拝のあり方の学びに多くの時間を費やしました。当時の生き生きとした信仰と礼拝に、大きく目が開かれました。主がこれからの学びに、神を知るための知恵と啓示の御霊を与えてくださいますよう、お祈りください。

2．個人伝道

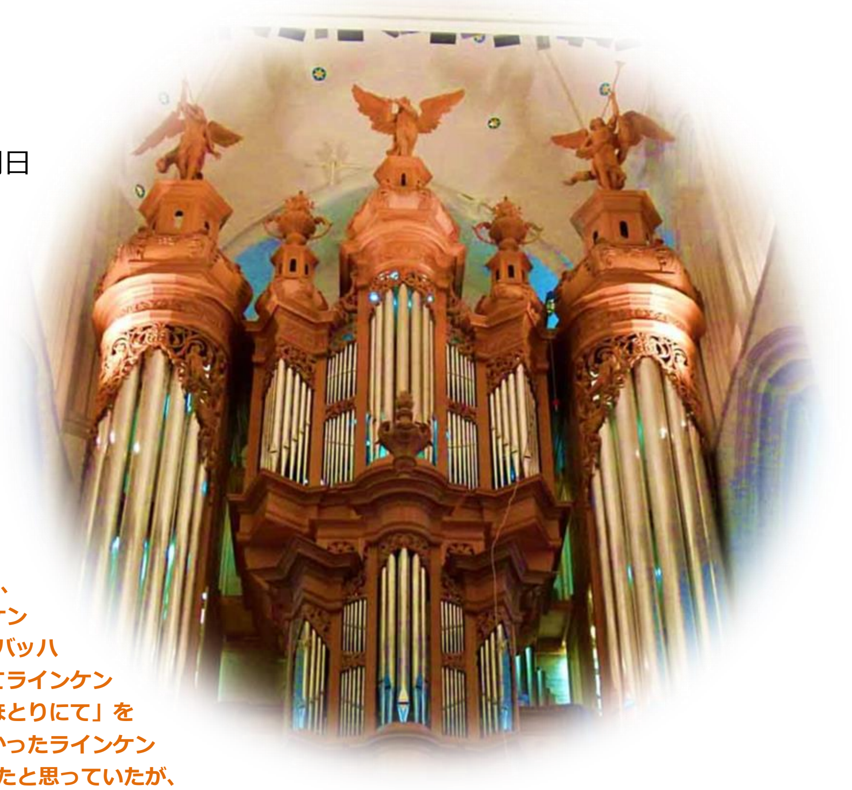
A さん、B さん、C さんのために。A さんは、主が、日々彼女にみことばの光を与えてくださり、確実にイエス様の道へと導いてくださっています。B さんは聖書の教えに大きな興味を示しています。C さんは、バッハの研究をしておられ、バッハの音楽の精神である聖書を知りたいと願っておられるようです。この３人のためにお祈りいただければ感謝です。

3．体調

２週間ほど前に階段から足を踏み外し、下まで転落しました。幸い、背中、腕の打撲と頭のたんこぶのみで済みました。主の守りがあったことに感謝しています。ただ、昨年の秋ほどではありませんが、再び首の後ろの部分に圧迫を感じるようになりましたので、回復のためにお祈りいただけますなら感謝です。脚部の湿疹は、かなりよくなってきました。全身のかゆみは 90%おさまりました。お祈りに感謝いたします。

〜〜

Jesus ist wahrhaftig auferstanden！
「イエス様は確かによみがえられました！」



主の復活をお祝いする素晴らしい一日、そして明日からの、復活の主が弟子たちと共に歩まれた 40 日間も、皆さまにとって、感謝と喜びの時となりますように！
主の恵みが、皆さまと共にありますように！

Atsuko Kudo

※写真は、ハンブルク、カタリーナ教会のオルガン。
ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685-1750) は、リューネブルク時代（バッハ 15〜18 歳ごろ)、何度もハンブルクを訪れ、この教会のオルガニストを務めていたヨハン・アダム・ラインケン(1643-1722)の演奏に聴きほれた。1720 年、35 歳になったバッハは再びこの教会を訪れ、今度は、老師ラインケンの前で、かつてラインケンが用いていた教会讃美歌集からのコラール「バビロンの流れのほとりにて」を主題にした即興演奏を披露する。ほとんど人をほめることのなかったラインケンが、バッハのその演奏に大変感動し、「私はこの芸術は死に絶えたと思っていたが、今、あなたの中に生きているのを目の当たりにしました。」と賛辞を述べたことは有名である。

私事だが、ここは、2007 年の春、解決の糸口が見つからないひとつの大きな難題を抱えていたときに、主の不思議なご臨在に触れる体験をした場所である。ここで私は主が共にいて私を強め助け守ってくださることを確信し（イザヤ 41:10)、その難題を負って、一歩踏み出す決心をした。